

二 星



夏休みの三つのお願い〜全校集会から〜

夏休みを迎えるにあたり、生徒の皆さんに三つのお願いがあります。

一つ目 「命」が最優先。

何よりも命を大切にしてください。

例えば、「時間に遅れそう」だということ、無理に急がないこと。まずは相手に連絡をして、遅れることを誠実に伝え、謝ります。

よく、時間に遅れると怒る人がいますが、時間間に合わなかったから怒るのではなく、誠実さが感じられないから怒るのです。

心を込めて、相手に対して謝り、次にまた同じ失敗をしないように気をつける。これが大事なことです。

また、車の往来が激しい中で道路を横断したとき「渡れそうだ」という誘惑に負けない。そんなことに人生をかけない。

命をかけて渡っても、五分と時間は変わりません。

さらに、「遊泳禁止」の海で泳ごうとしたり、プールで準備体操を怠ったり、禁止されている溜め池で釣りをしたり、そんな危険は絶対に犯さない。



皆さんの命は家の人にとっても、私たちにとっても「何にも変えられない大切な宝」です。

「命」に関わることは臆病が良い。「命」に関しては慎重であり続けてください。

二つ目 「自分探し」

ある程度、自分で時間をコントロールできる夏休みは、興味・関心を見つけて絶好の機会です。

前回の集会で、私は「中学二年のときに先生になりたいと思った」と話しました。ただ、これ以外にも、野球選手や漫画家、ツアーコンダクターになりたかった時期もあります。十代のうちに、いろんな自分の適性を知り、今の仕事にたどり着きました。そういえば、友達が入院して千羽鶴を折っていたとき、同じ作業をずっと続けることが耐えられず、「こつこつ職種は自分に向いていないな。」と感じ、工場での勤務や、料理人は進路の選択肢から外したことを覚えていきます。

いろんな自分の適性（向き不向き）に気付くこと

その子にとって本物の文化に出会う経験・体験の



例えば、「ああ、明日の朝、起きるぞ。」は挑戦とは言いません。つま先立ちとは違います。「ああ、明日の朝、午前二時に起きるぞ。」も、その目的が分からないから「挑戦」とは言いえない。い。「夏休みは朝六時に起きて勉強するぞ。」とか、「毎日、部活動に行く前に英単語を五個覚えるぞ。」となつて、はじめて「挑戦」と呼べます。ここで注意してほ

はとても重要です。学校生活があると日々の忙しさに埋もれ、なかなか気づけないことも多いのです。ぜひ、自分と向き合える時間がある夏休みを利用して、一つでも、一つでも、自分の適性に気づいてほしい、そう願います。

三つ目 何でもいい、「挑戦」してほしい。

「三つの挑戦」が理想ですが、一つでも構いません。「挑戦」とは、今の自分よりも少しだけ背伸びをするということです。

試しに皆さん、つま先立ちで周りを歩いてください。さっきまでとは違う景色が見えますね。ほんの少し、ちょっと背伸びをしただけで、世界の景色は変わるのです。「挑戦」は自分の世界を変えることができます。



しいのは、「挑戦は持続可能」ということ。

これまでやったこともない朝の勉強なのに、「毎日、英単語を100個ずつ覚えるぞ。」は無理。

だから、人によっては「毎朝とにかく英語の教科書を開く

ぞ。」でも良いのです。これも立派な「挑戦」です。今まで見ていた景色から、少しの高みを目指すこと。

「挑戦」の大事なポイントは、

「達成可能」「持続可能」「プラス」「少しの背伸び」。

挑戦を続ける人の見える世界はどんどん広がっていきます。自分の人生がどんどん豊かになることを実感できるのは、本当に楽しいですよ。

最後に。私の自慢は、人との出会いに恵まれていること。事実、君たちや唐中の先生、保護者の皆さんと出会ったこの三か月は本当に幸せでした。

四月からこの夏休みまで、一人一人が、それぞれの個性や事情に合わせて、毎日の生活を積み重ねてきてくれたことに感謝しています。たくさん笑顔と感動をありがとう。

夏休み明けも、君たちと一緒に成長していきたい。私も君たちと一緒に成長したいですから、この夏

休み、私も何かに「挑戦」します。夏休みが終わったら、紹介しあえるとうれしいです。

夏休み明けの皆さんの笑顔を心から楽しみにしています。また一緒に、この唐桑中学校で頑張りましょう。

令和四年七月二十日

佐々木海香先生ご結婚

七月二十二日、養護教諭の佐々木海香先生が婚姻届を提出し、「日出(ひのぞ)」と改姓されました。

五月二十二日に高崎先生が披露宴をあげたのに続く慶事で、本当につれい報告です。

生徒の皆さんには、夏休み前の全校集会でお話しました。その場で、集会に参加した生徒全員から、大きな大きな拍手を受けました。

本当におめでとうございます！

紙面が余ったのでコラム

三十？年ぶりの気仙沼の生活

高校時代は昭和の終わり。気仙沼の中央近隣に住む友達から、中央でない私たちは「田舎」と馬鹿にされていたものです。

八瀬から自転車を通っていた私は「毎日がサイクリング」、唐桑や大島の友達は「毎日が海外旅行」、津谷や歌津から来る友達は「毎日が鉄道旅行」。

宮城の最北端、気仙沼に住む人間が、同じ地域の間を馬鹿にしていたのですから、困ったものです。まさに昭和。五十歩百歩ですね(笑)。

当時、同じ田舎同士であり、仲間意識もあった唐桑なのですが、三十？年ぶりに訪れた私は、この土地の豊かな環境と暮らしに圧倒されています。

大学は東京だったので千葉と東京に住みました。その後、教員になってからは県南に住み続けています。ロケットの見える学校や、蔵王連峰をはるかに眺める学校にも勤めました。その間、長年に渡ってバレー部を顧問していたので、県内はもちろんのこと、よく、山形県や福島県にも遠征をしたり、大会に参加するために各地を訪れました。その土地その土地に魅力があり、山の幸がおいしかったり、日本海に沈む夕陽が美しかったり……。それぞれの土地の素晴らしさを感じながら遠征を続けたものです。

唐桑には、他の市町にはなかった魅力があります。この町のすこさは、「海と山の恵みを受けた歴史と、恵みによって築かれた豊かな暮らし」を実感できるところ。

まだ陽のあるうちに学校を出ることができたとき、中井方面や小原木方面にも車を走らせることがあります。山々の頂から深い緑が稜線に続き、針葉樹と広葉樹のコントラストが見事なまま、青とも緑とも呼べる紺碧の海につながっています。その緑の稜線に沿って建ち並ぶ家々の立派なこと！

夕陽を受けた濃い緑と深い青に人工色の瓦屋根が映え、稜線に沿って築かれた城壁のような石垣に、この地で暮らす人々の誇りと、この土地への愛情を感じずにはいられないのです。

「唐桑すげえー！」

家族に送った写真は、風光明媚な美しさにあふれています。「きれいだね〜。」と大好評です。